

【お洗濯を始める前に】	2
ココチ良い、キモノと暮らす。	3
戦前のお洗濯事情	4
なぜ「洗えなく」なってしまったのか?	5
洗えるか・洗えないかの境界線	6
【生地を見分ける】	7
強撚糸の問題	8
ちぢみ率	9
移染の問題	10
風合い	11
【洗剤について】	12
洗剤の影響	13
洗剤の選び方	14
洗剤以外の洗浄剤	15
その他の洗剤や助剤について	16
【失敗しない洗い方】	17
生地のテスト	18
型崩れしないようにする	19
お洗濯の仕方	20
【仕立てる前の注意点】	22
水通しをどこへ頼むか	23
水通しの仕方	24
付属品について	25
糸について	28

【お洗濯を始める前に】

【ココチ良い、キモノと暮らす。】



着物は昔、普段着でした。
その当時は、もちろん着物も
自宅で洗濯していました。

着物を着なくなってから、い
つの間にか、着物は洗えない
ものになってしまいました。

その結果、「洗える着物」という名の化繊の着物が流行する結果に。

本来洗えるはずのものを、洗えないものにしてしまった。
そのせいで、化繊よりもずっと快適でココチ良いはずの正絹が、
洗えなくて不便な素材と思われ、嫌厭され始めています。

もっと、天然繊維を着てもらいたい。
正絹の気持ち良さを知ってもらいたい。

本当に快適な着物生活を送るにあたって、正絹というのは欠かせ
ない存在です。その肌触りの良さは、絹に勝るものはありません。
着物を、より心地よく快適に着ていただくために、着物で暮らし
ていた時代の主婦の知恵を、今、よみがえらせたい。

この冊子は、そんな想いで作りました。

「ココチ良い、キモノと暮らす。」

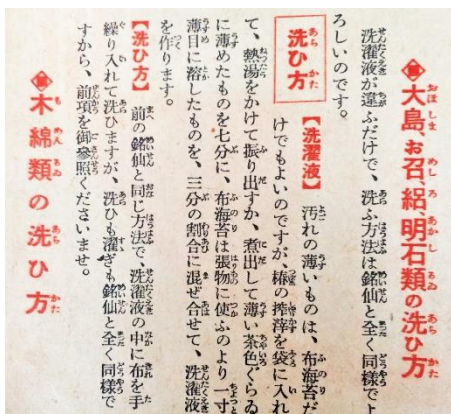
そんな、素敵な着物生活のヒントになれば幸いです。

【戦前のお洗濯事情】



昭和 10 年の「主婦之友」で、『お洗濯一切の仕方』という特集の号があります。

当時は洗い張りも主婦の仕事で、普段着はすべて自宅で洗っていました。



生地の種類に合わせて、適した洗剤の種類などが細かく書かれています。

銘仙も太島もお召しも紹も明石ちぢみも、みんな自宅で洗っていたということがわかります。

当時の主婦にとっては、家族の着るものを全て解き洗い張りして仕立て直すのが当たり前の家事だったので、当然、普段着は洗えるように仕立てていましたし、丸洗いでできないものでも、自分で解き洗い張りをして仕立て直して着ていたのです。

おばあちゃんの家に行くと、張り板があったという記憶がある方も多いのではないのでしょうか。

【なぜ「洗えなく」なってしまったのか？】

戦前の文部省認定の女学校の教科書には、こんな記述があります。

新しい布地は仕立てる前には、必ず布の整理といふことをしなければなりません。即ち伸びてゐる部分は縮ませ、吊れた耳は伸ばして平らにするとか、また水分に遇って縮むおそれのある布地は初めから水分を與へて、縮むだけ縮ませておくなど、その地質によつてそれぞれの手あてが必要であります。かういふ仕事を総括して布地の整理と申します。よく反物の中には、整理済みといふ検印のあるものを見かけますが、あれは只今申しましたやうな仕立てるための整理ではなくて、反物として市場に出すのに見苦しくないやうに手当を済ましてあるといふ印でありまして、決して買った人達がすぐにそのまま仕立ててよいといふ印ではありませんから、整理済とあるものでも仕立てる前にはその布地に適当な手当をしなければなりません。



『仕立てる前に水通しをする。』

着物を着ていた時代には、主婦は全員、当たり前になっていたことですが、着物が礼装になってしまったせいで、今は誰も知らないし、やらなくなってしまったのです。

これが、着物が洗えなくなってしまった理由です。

【洗えるか・洗えないかの境界線】

よくお客様に、「これは洗えますか？」と質問されます。
しかし、洗えるか洗えないかの境界線は、「人によって」違います。

例えば、昔の主婦のように自宅で洗い張りができるレベルの人がうまく洗っていたものでも、ワイシャツを家で洗うのが苦手なクリーニングに出している人が、同じように洗えるとは限りません。皺ができて多少色落ちしても、普段着だからぜんぜん気にしない、という人が洗っていたとしても、仕立て上がりのピカピカの状態で着たい人は、洗わない方が良くもかもしれません。

同じ大島でも、骨董市で安く買った大島を洗ってさっぱりしたい、という場合と、新反で買って1回だけ着た大島を洗いたい、というのでは、メリット・デメリットのバランスが全く違います。

着物を洗うかどうかは、①洗濯・アイロンの技術がどれくらいあるか、ということ、②型崩れや皺をどこまで許容できるか、ということ、③洗うメリットがどれくらいあるか、ということなど、いろいろなことを総合的に考えて判断する必要があります。

洋服も、Tシャツを洗うのとジーパンを洗うのとジャケットを洗うのとタキシードを洗うのでは、洗い方も回数も違います。夏物の長襦袢なら、Tシャツと同じくらい洗える方が良いでしょうし、単衣の普段着はジーパンぐらいの感覚で洗えると気持ちが良いと思います。裕の着物はジャケット、礼装はタキシードと同じようなイメージで扱おうと、洗濯の境界線が見えてくると思います。

【生地を見分ける】

【強撚糸の問題】

強撚糸とは、「強くねじった糸」のことです。主に、「 」や「 」「 」「 」などに使われています。強撚糸で織られた生地は、しなやかで皺になりにくいという特徴がありますが、水に濡れると激しく縮み、シボが立ちます。

「 」や「 」などは、縮んでシボが立った状態で着るものなので、それ以上には縮みませんが、 や 、 などは注意が必要です。



特に は、元の形がなくなるほど縮むものもあります。大正から昭和初期に に多用されていた、 などは、特に注意が必要です。

しかし現代のちりめんは改良されており、糸のねじる向きを交互にして織ってあるので、昔ほど激しく縮むことはありません。 、 などのように、名前に とついているものや、 などは、現代の改良されたちりめんですので、昔のものほど縮むことはありません。

【ちぢみ率】

洗えるかどうか判断するときには、「ちぢみ率」も非常に重要です。

【10%以上】 ■■■■■ や ■■■■■ など
※幅もかなり縮むので着られなくなります。

【7~10%】 ■■■■■ や ■■■■■ など
※幅で約3%ほど縮む。かなり硬くなります。

【5~7%】 現代のちりめん ■■■■■ など
襦袢(■■■■・■■■■・■■■■) など
※幅で約2%ほど縮む。ものによって洗濯可能。

【2~5%】 ■■■■■・■■■■・■■■■ など

【2%以下】 ■■■ など

例えば、襦袢の身丈で7%というのは9cmです。つまりすでに仕立ててしまった襦袢を洗うと9cm縮むということになります。9cm縮んでもかまわない、または縮んでも自分で伸ばせる、ということであれば、洗ってもかまいません。

■■■の場合、2%というのは身丈で3cmです。

単衣の■■■が洗えると言われるのは、縮み率が少ないためです。

ただし袷の場合には、裏地が8cm縮みますので、表地が5cmほどあまる計算になり、表かぶりになるので着られなくなります。


【移染の問題】

もう一つ重要なのは、移染の問題です。

着物は染料が洋服と違うため、どうしても色落ちしてしまいます。洗濯耐性よりも工芸品としての美しい発色を優先するからです。

特に、昔の染料の赤・黒・紫などは水が真っ赤になるほど色落ちします。着物が普段着だった時代には、色落ちしないで洗える洗浄剤があり(※詳細は洗浄剤のページを参照)、それを使って洗濯していたので移染の問題はそれほどありませんでしたが、現代の洗剤で洗濯すると、白いところなどに色が移ってしまいます。

その他には、戦後の物のない時代につくられた友禅で、水彩絵の具のようなもので描かれていて、水に入れると柄が全てなくなるようなアンティークや、昔の安価な量産品などで、全く色止めがされていない物もあるので、注意が必要です。

例えば、ひと昔前に流行った  などは、洗うと無地になります。現代の製品は、色落ちしにくいように作られているものが増えていますが、昔のものは注意が必要です。

その他に、草木染や手染めなどの工芸品は、染料も繊細なものが多く、洗わない方が良いものも多くあるので注意が必要です。